

オビシヤ

金原を歩く

新年を迎え、市内では集落や同姓の人たちが神社や集会所などで「オビシヤ」という年中行事を行うところが多くあります。

野田地区野手・六社大神の「御歩射」のように、弓矢で的を射る「御的^{おまと}神事」が「オビシヤ」の呼び方につながるという説があります。オビシヤは、集落での新年の初寄り合い、共同飲食の場となるなどさまざまなかたちで現代に伝わっています。

昭和50年代前半に旧八日市場市場を調査したところ1月から2月にかけて2、3の集



金原の大かがり御的神事

落を除きほとんどが大字(集落)単位で「オビシヤ」や「セイレン」が行われていました。行事の由来や内容を記した記録も探しましたが、わずかしか見つかりませんでした。その中に、江戸時代の金原村(飯高地区)での「御奉謝」がありました。

金原村には日蓮宗・妙大寺があり、同寺で3つのオビシヤが行われていました。1月13日は本尊・三宝^{さんぼう}様の御奉謝で、この時に集金したお金は村内の橋の掛け替え費用などに充てていました。同28日は鬼子母神^{おんこぼと}のオビシヤがありました。175

1年ごろから始められたと記録し、明治の記録にもお堂が存在し、鬼子母神が安産信仰されたことから、おそらく女オビシヤだったのでしょう。2月8日は

妙大寺のお祖師様(日蓮)のオビシヤで、1852年に村役人に願い出て始まったとされます。

金原には鎮守として三社神社がまつられ、江戸時代には金原、安久山、片子、大堀の4か村の村びとの信仰がありました。石灯籠には1805年に同村の佐藤四良兵衛と4か村の男女の寄付で立てられたことが刻まれています。明治時代になり、三社神社は金原村だけの鎮守となりました。現在、成人の日の明け方、

神社境内で「大かがり御的神事」が行なわれています。その様子は、広報紙「ちくの話」に、「境内に組んだ高さ約6m周囲15mの大かがりに火を入れると、勢いよく燃え上がり、地区の人たちは無病息災を願いました。その後、神社の裏手では御的^{おまと}神事が行われました」と紹介されています。

調査時から30数年が経ち途絶えてしまった地域の伝統行事もある中、金原地区のオビシヤが続いていますが、ごく感じました。

(元)市職員・依知川雅一

問 秘書課広報広聴班

☎ 73・0080